会長メッセージ

「明日を信じて、明るく、前向きに」

総本部 会長　地藏 哲皚

新年あけましておめでとうございます。

会員の皆さまには、お健やかに新春をお迎えになられたこととお慶び申し上げます。

コロナ禍で過ごした3年間も漸く共生を図れる段階になりましたが、すべての活動が、エンジン全開というには今少し、という状況で新しい年となりました。

今年の干支は癸卯（ミズノトウ）、中国の古典によれば、癸は、植物の内部にできた種子が測れるほど大きくなり、春を間近にして、萌え出る用意をしている様。卯は春の訪れを感じるという意味で。草木が茂り地面を蔽うようになった状態だそうです。つまり、これからの成長や飛躍のために、力をため準備し育んできたことが十分に実り芽吹き始める年で、大きく飛躍し一気に広まり始める、努力が一遍に実り始める年であると言います。私達もここ数年、コロナ禍に苛まれ、思うような活動が出来ず、明るい展望が描けなかったのですが、今年は「飛躍」「向上」の年であると信じて、自らチャンスを掴み大いに発展したいものであります。

昔から成功するために必須の3条件に、「運・鈍・根」という言葉があります。「運」とは巡り合わせで、どのような時代に、どのような環境で生まれ育ち、運に恵まれるか、恵まれないか、誰もあずかり知らぬことですが、この捉えどころのない運に立ち向かうには、鈍と根で立ち向かえ、と教えています。「鈍」は、鈍感の鈍ではなく、粘り強いということ、正しいと信じて目標に向かってまっしぐらということです。また、「根」は根気、根性です。何があろうとへこたれず続けることです。新年に当り私達も今一度この言葉の教えを噛みしめ、粘り強く、へこたれず、目標に向かって生きなければならないと強く思っております。

稲盛和夫さんの「利他の心」

昨年8月90歳で亡くなられた、稀代の名経営者と言われる京セラの創業者稲盛和夫さんの生前の講話の中に、「運命という縦糸と因果の法則という横糸」という言葉があり、「人は皆運命の命ずるままに人生を生きているが、その中でいろいろなことに遭遇をした時に、善いことを思い、善いことを実行し続けたとき、その人の運命はよい方向へと変わっていく」「人生には、因果の法則というものが厳然として備わっている」とありました。稲盛さんは裸一貫で立ち上げた京セラを1兆円を超える大企業に育て上げただけでなく、義憤にかられて第二電電（現・KDDI）を創業して、我が国の通信事業の飛躍的発展に貢献し、更には78歳の時、一旦倒産した日本航空の再建を託され、悩んだ挙句、無報酬で会長に就任、僅か3年足らずで再上場へと導き「奇跡」と称賛されました。これは並大抵の事ではありませんが、根底にあるのは稲盛さんの「人のため世のために尽くすことが、人間としての最高の行為である」という「利他の心」と「どんな逆境にあろうと不平不満をいわず、慢心せず、些細なことにも全身全霊で打ち込み努力してきた」「どのような災難に遇おうとも、それは試練として神様が私に与えてくれたものだと明日を信じ、明るく、前向きに人生を歩んできた」とありました。まさしく「運・鈍・根」です。私はこれを読んで限りない感動を覚え勇気が湧いて参りました。思い起こせば、6年前の総本部第13代会長に就任した時、『温故新生』のスローガンに、「視座を変えて」の合言葉を付加し、現実を直視し、夢と希望を捨てず、より真剣に検討を深めようと努めました。その後、「自律自助」をスローガンに掲げ、皆さんと共に、「関西吟詩の発展を遂げるために」を信念に様々な課題に取り組んで参りました。ここ3年はコロナ禍の壁が立ちはだかり大きなダメージを受けましたが、これからも「利他の心」で自らの規範に基づいて行動し、へこたれず「運・鈍・根」で、粘り強く、信ずる道をまっしぐらに進んで参ります。

本年はいよいよ創立90周年を迎えます。全国を四地区（近畿四国・東海・中国・九州）に分けて、記念大会も開催されます。この1年をかけて、会員の皆様と一緒により良き横糸を紡ぎ更なる発展への決意を確認する機会にしたいと存じますので、よろしくご協力をお願いいたします。

この1年が、皆様にとっても、素晴らしい年でありますことをお祈りし、新年の挨拶とさせていただきます。

（了）